



特集 いまこそ、いのちと暮らしと子どもたちのために！

2019年6月15日、萩市にて、日本カトリック正義と平和協議会改憲対策部会、広島教区、「イージス・アショア」の配備計画の撤回を求める住民の会（「住民の会」）の共催で、「萩の街から東アジアに虹をかける」と題する集会を開催しました。

イージス・アショアとは、レーダー・コンピューター・垂直発射装置からなるイージス艦のミサイル防衛システム（イージス・システム）を、陸上に配備した装備品のことです。レーダーは強力な電磁波を発信し、目的探知か

らミサイル発射まで、すべて自動で行われます。ミサイルは数十発が同時に発射されます。もし、最先端の機密兵器イージス・アショアが配備されれば、周囲は昼夜厳戒な警備体制がとられ、避難訓練が日常に行われるようになり、生活環境が激変するでしょう。万が一有事となれば、配備地周辺が先制攻撃の第一目標となります。ミサイルが発射されると、切り離されるブースターの落下事故も予想されます。

第2次安倍政権は、安全保障法制を強行採決した2015年9月からわずか約2年後の17年12月、

「イージス・アショア2基購入」（2基で6000億円！）を閣議決定し、すぐさま、配備候補地として山口県萩市（むつみ演習場）と秋田県秋田市（新屋演習場）の名前を挙げました。しかし最近では、はじめにむつみと新屋ありきとも言える、両候補地決定の手続きのずさんさが発覚しています。萩市では、「住民の会」を結成し、イージス・アショアの危険や配備による環境破壊についての勉強会、配備反対の声を集めるための署名運動が続いています。

集会は署名運動の拡大を願い、「署名でつながらる平和の輪」という副題を付けました。ジャーナリストの前田哲男さんを講師に迎え、「住民の会」代表の森上雅昭さんが現地の状況

を報告しました。集会終了時には、もう一つの配備候補地である秋田県新屋で歌われている「イージス・アショアいらぬ」という歌を、シスター山本きくよ（援助修道会）のリードで、声を合わせ歌い、秋田の人々との連帯を確認しました。

参議院選挙が終わりました。改憲勢力の議席は2/3を割りました。私たちは、いま、なにをすべきなのでしょう。いまこそ立ち上がって、いのちと暮らしと子どもたちのために、できることから一つずつ、行動を始める時だと思います。本号後半では、福島原発事故被害地の子どもたちを被ばくによる健康被害からまもるために行われている「保養」のとりくみを紹介します。

「自分たちの置かれた場で平和を実現する」 ～イージス・アショア配備反対

■ 中井 淳（イエズス会、下関労働教育センター所長、広島教区正義と平和協議会担当司祭）

昨年2018年11月に沖縄でイエズス会の日韓会議を行った時に、講師としてお呼びした平良修牧師（日本基督教団佐敷教会）の言葉が何度も思い返されます。「本土から駆けつけ、辺野古の座り込みなどにたくさんの方が参加してください。それは勇気づけられるし、とてもありがたいことです。ただそれだけでは問題は解決していかないでしょう。自分たちの置かれた場で日米安保の問題にどれだけ本気で関わっていくのかどうか問われています」。

自分の置かれた場でどのように沖縄に連帯するのか。山口県下関を拠点に活動している私ができること。その時、イージス・アショアの萩市配備という問題がまず浮かびあがったのでした。

そんなおり、日本カトリック正義と平和協議会がイージス・アショア配備計画撤回のための集会を地元「住民の会」の方々と共に連帯して萩で開くということになり、広島教区も共催の名乗りをあげました。私は、実際に自分の目でまず

配備予定地となっているむつみを見てみようと思いかけてきました。「住民の会」代表の森上雅昭さんの案内で初めて目にしたむつみは、緑の深いとても美しい山間の村でした。そこでは地下水が湧き出ていて、地元の人々はため池を作って生活用水にもしています。そんな風光明媚な光景を前にしながら、そこにミサイル基地ができてしまったらどうなるのか、と政府の計画への怒りが湧いてきました。

前田哲男先生

集会前日から講師の前田哲男先生を迎え、時間を共にし、当日の午前中、どうしても講演の前にむつみを目にしたいという前田先生に同行しました。前田先生がしてくださった講演はわかりやすく、日米安保という構造の中で、アメリカのためのミサイル基地を萩、むつみの人々に押しつけられようとしているという構図が見えてきました。（朝鮮民主主義人民共和国のミサイル基地のある舞水端里を中心として正射方位図法で地図を描くと、配備予定地とされてい

P4に続く➡

エクアドルから萩へ、そして未来へ…

■浅井朗太

(『イージス・アショア』の配備計画の撤回を求める住民の会、自然派カフェ La Ceibaオーナー)

2001年9月、地球の裏側、赤道直下、南米エクアドルの雲霧林うんむりんの中にあるフニン村。電気も水道もない小さな村は、森を伐採せず有機珈琲を栽培し、経済的自立を始めた頃だった。森林農法のはしりだ。彼らがなぜそれを選んだのか。

足元に転がるさび付いた日本製の醤油の空き缶。フニン村から歩いてほどない山中にそれは転がっていた。村を流れる清流の上流、日本と米国の企業が銅山開発の為に試掘に訪れ、反対をする村人たちが焼き払い、追い払ったキャンプ跡地。銅山での安定した雇用の代わりに、受け継がれた森と清流を選んだ村人たちは、新しい時代の持続可能なコミュニティを選んだのだ。

地球の裏側で、自然と生活に犠牲を強いて、利益を求める世界がそこにはあった。しかも、自分と同じ国の人たちが関わっている。足元に転がる醤油の空き缶と、艶々と光る珈琲の葉を愛おしそうに見せるフニン村の人々の笑顔は、その後の生き方を大きく転換させた。

妻と出会い長男を授かった頃、東京・横浜を拠点とする自然栽培の流通・飲食業を営む会社で、フニン村の人びとに恥じない農産物や加工品を提供する仕事に明け暮れていた。生産者にも、お客さんにも環境にも負荷の少ない商品とその仕事に一切の不満はなかったが、自分のお店を持ちたいという勢い勇んだ夢と、満員電車の通勤時間の虚しさが、妻の故郷“萩”への移住へと導いた。

世界に誇れる萩の美しい海、日本の原風景そのものともいえる里山の風景と風土、生活の知恵。歴史で有名な街は、むしろ豊かな自然の残された多様性のある貴重な場所として眼に映った。念願の自分の店、地産地消・無添加・無農薬にできる限りこだわった小さなカフェを持つこともできた。

人との出会いに恵まれなんとか続けて11年。



山中で見つかった醤油缶を手にする筆者

街への愛着と未来への恩返しと思い、市議会議員としての仕事をさせて頂くことになったその年。フニン村の人々が守ったものを、この萩の地で守る使命に直面している。

妻の実家から車で20分北東へ行ったむつみという中山間地域に、日本で初めての固定式迎撃ミサイル基地ができるというのである。もともと昭和30年代中頃から陸上自衛隊の演習場がある場所。とはいえ、日常はだれもおらずのどかな里山そのもの。フェンスのすぐ脇で稲作が行われ、演習場に降った雨水が湧水として湧き、農業・生活が紡がれている。

迎撃ミサイル基地「イージス・アショア」が、自然や暮らしを顧みることなく、政治とカネのために配備される。地球の裏側で学んだ生き方は、それを拒否する。そして同時に、イージス・アショアなしで成される平和で豊かな暮らしを、代替案として提言・実践しなくては。それが本当の使命だ。

➡P.2から続く

る秋田市、萩市の延長線上に米軍の最重要軍事施設のあるハワイ島、グアム島に結ばれるのです!) 私は、講演の内容ももちろんですが、前田先生の人格にひきいられました。80歳になられても依然かくしゃくとされていて、同時にその話し方、たたずまいからは謙遜さが伝わってくる方でした。そして、何よりも心に残る言葉がありました。政府の計画を民衆の力が覆したケースがどれほどあるのかということ問い尋ねたときでした。いくつかの例を挙げてくださったのと同時に「民衆の抑止力」という話をされました。「広島・長崎以後、核兵器が戦争に使用されたことは一度もない。それを、キッシンジャーをはじめとした政治家、専門家は、核の抑止力のおかげだという。しかし、決してこれは論証できるものではないけれど、私は『民衆の抑止力』がそこにあったと思うのです。広島、長崎の原爆で亡くなった人々の、そしてそれに連なる、核の使用をゆるさない人々の、『ナガサキ・ヒロシマの抑止力』というものがあると、私は信じます」、そのような言葉が軍事ジャーナリスト・評論家の方から出てきたことが新鮮でもあり、私自身のキリスト者としてのアイデンティティーを励ましてくれる言葉でした。

キリストの十字架と復活の記憶には広島、長崎の原爆犠牲者たちの記憶も刻まれています。その記憶に目を向け、耳を傾け、記念(アナムネーシス)するということは、暴力の犠牲者たちの叫びを背に受けながら、平和の作り手となっていくことなのだと思います。その十字架の記憶の中にある人々には確かに力がある。今も亡くなった人々が平和のために働いてくれているという前田先生の言葉は、実際に長崎でジャーナリストとして長いこと活動されてきた先生の体験に基づく確信から発せられたものだったのでしょ。

防衛省住民説明会

集会の講演後は急遽18時からむつみで行われることになった防衛省による「イージス・ア



「萩の街から東アジアに虹をかける」(2019年6月15日 サンライフ萩) 講師の前田哲男さん(写真手前)と「住民の会」代表の森上雅昭さん(写真奥)

ショア配備候補地の適地調査の結果報告説明会」に前田先生、参加者たちとともに駆けつけました。10数名の防衛省幹部たちが前に座り、集まった住民たちに適地調査の報告をした後、質疑応答がなされました。その住民説明会は前提からして、政府の要求を無理矢理にでも「理解させる」というもので、到底誠実な話し合いではありませんでした。「理解してほしいと言うならば、ミサイル基地はいらないという住民の気持ちも理解してください」というある方の痛切な叫びがそれを表しています。ある「住民の会」メンバーが最後に言われました。「筋が違うのではないか。こんな巨大な計画の責任をこんな小さな町の住民たちに押しつけて。むつみの人たちは未来永劫ミサイル基地を受け入れた町として非難されてしまう。まずはきちんと国会で議論する。そういうプロセスをしていくのが筋なのではないか」。

集会には、山口全域の市民の方たち、広島教区の信者さんたち、さらに遠方からも200名を超える方が足を運んでくれました。「住民の会」のメンバーとして頑張られてきた萩在住のシスター磯村かずよ(ベリス・メルセス宣教修道女会)と、「住民の会」の方たちは、多くの人たちが連なってくれることに勇気をえたとその喜びを伝えてくれました。その後各小教区でも配備撤回のための署名を集めています。

イエスのまなざしと耳で

私は、広島教区山口島根地区の社会教説の担当司祭として主日は全小教区を周り、ミサをし、社会教説の講義をします。今年フランシスコ教皇の回勅『ラウダート・シ』を主なテキストとしています。第1章で、教皇は地球上で起きていることを、胸を痛めながら知りましょうと語り、問題を挙げていきます。もし教皇フランシスコが私たちの現場にいたら何を語るだろうか、「イエスのまなざしと耳」を持って「今ここで」傷ついた地球の叫びを聞くなればどのように行動せねばならないのかということをお互にわかっていきます。そして、私たちが向き合わねばならないものとして確かにイージス・アショアというミサイル基地配備の問題が横たわっていることを伝えます。

「あきらめてはいけません」と教皇は私たちに奮い立たせます。私も、確かに「ヒロシマ・ナガサキの抑止力」、「民衆の抑止力」があると信じます。私の活動拠点である下関労働教育セ



イージス・アショアが配備された場合、汚染が懸念されている羽月湧水（萩市むつみの名水）は、地元の人々の信仰の対象ともなってきた。

ンターが主催する市民フォーラムでこの問題を取り上げること、街頭に立つこと、できるだけ多くの人に、日米安保の問題について、イージス・アショアの問題について知らせていくこと。できることは確かにあるのです。

十字架の記憶、イエス・キリストの傷の中に入っていくならば、大きな力が背中を押し、道を開いてくれることを信じます。

Q イージス・アショア 国防益 国防のためになるの？

イージス・アショアは、弾道ミサイルを宇宙空間で撃ち落とす武器。その他の攻撃には対抗できません。

日本は、4隻だったイージス艦を、6隻に増やし、2021年には8隻態勢にすること、全国にあるレーダー施設28のうち、17か所を2023年までに弾道ミサイル対応にすることで、弾道ミサイルに対し日本全域の防衛力を確保する計画でした。

ところが イージス・アショアでは対応できない極超音速滑空弾（M20以上）の開発を中国・ロシアは進めています。完成に5-6年かかるイージス（M15）の能力は時代遅れとなるでしょう。

弾道ミサイルにはイージス艦と既存レーダー施設で十分対応できるアショアは過剰、不要なものです

Q 攻撃対象になります。近辺は大丈夫？ 攻撃対象

常に攻撃対象として、テロの脅威にさらされます。イージス・アショアを守るためにPAC3というミサイルが配備されます。宮古島の様に、説明の無いまま危険な弾薬が置かれたりするかもしれません。

電波障害を避けるために、近隣上空は飛行制限がかかり、ドクターヘリの飛行にも制限がかかるかもしれません。

大がかりな造成工事は、ジオパークに認定されている阿武火山群である自然を破壊し、溶岩性台地が古代より育む湧水に影響を及ぼすでしょう。豊かな自然とそれに根ざした農業、暮らしを破壊するでしょう。立派な道路や建物が交付金で建てられても、暮らしを支える生業ができなければ何の意味もありません。

移住したい人は減り 出て行く人は増えるでしょう

Q 本当のところ、なんのために イージス・アショアを買うことにしたのか？

2017年にアメリカ大統領と日本の首相との会談で話し合い、その後、イージス・アショアの購入は閣議決定されたのです。北朝鮮・中国・ロシアの弾道ミサイルはアメリカ本土まで届くことを計算しており、イージス・アショアはアメリカ本土へ向かう弾道ミサイルの迎撃が目的です。日本人の税金を使って、アメリカを防衛する。そのために阿武・萩のまちが犠牲を強いられるのです。

イージス・アショアは、日本を守るためのものではない。

費用

¥ ? \$

イージス アショアとは なにか？ Vol2

“攻撃対象の街”になる前に 知っておくべきこと 国防のためになるの？ 経済効果は本当？

あなたの家の裏に出来るなら 何も疑問はもちませんか？



イージス・アショア配備計画の撤回を求める住民の会

発行：イージス・アショア配備計画の撤回を求める住民の会

お問合せ：090-1338-1841 Mail: hagi-morikami@codac.or.jp URL: https://noaegis2.wixsite.com/noaegis

住民の会発行のパンフレット。ご希望の方は090-1338-1841 森上まで。

原発事故から8年目。足元から考える支援活動

■ 佐藤裕子／原 慶子

JP通信215号（2019年4月）でもとりあげた、福島原発事故後に残る深刻な問題の一つ、低線量被ばく。100~200mSv以下の低線量被ばくの実質的な健康影響は未知数で、いつまでも不安でいるのは、むしろ復興の妨げになるとの声も大きく、政府も、復興政策推進のためと低線量被ばくの健康影響に対する不安払拭を進める。しかし目に見えず匂いもない放射線は私たちの身体的な実感を超えて知らないうちに染色体を傷つけ、とりわけ細胞分裂の活発な成長期の子どもへの影響が大きいことを否定することはできない。

こうした、子どもの低線量被ばくによる健康へのリスクを少しでも軽減するため、国内のさまざまな団体が「保養」という事業に取り組んでいる。「保養」は、一定の期間、放射能汚染地を離れることで体内セシウムを排泄を促し、子どもたちに外遊びの機会をつくり、同伴者も日頃のストレスから解放されるなど、さまざまな効果をあげている。そんな「保養」をなんとか継続するため、毎年夏、福島県内では「ほよ〜ん相談会」が開かれている。

保養支援と「ほよ〜ん相談会」

佐藤裕子（札幌地区正義と平和協議会）

去る6月8日（土）・9日（日）の2日にわたって、今年の夏の保養相談会「ほよ〜ん相談会」が福島県内2カ所（いわき市・二本松市）で開かれた。これは、「311受入全国協議会（2012年9月発足。以下「うけいれ全国」）」が2012年12月から続けている、保養に出かけたい人と受け入れたい人のマッチングのための顔を合わせての相談会で、この2日間で225組515人が来場し48団体のブースを巡り夏休みの保養の計画を話し合った。原発事故後に生まれた小さな子どもたちが走り回る会場の熱気に、まだまだ保養のニーズがあることを知る。

私は、札幌市を拠点とする「NPO法人みみをすますプロジェクト（略称みみすま）」の事務局として、主として子どもたちの保養支援、避難移住者への支援を続けてきた。この団体の前身は「東日本大震災市民支援ネットワーク・札幌（通称むすびば）」とあって、震災直後の2011年3月16日に「未曾有の災害と原発事故に、とにかく何かをしよう」という思いを抱えて集まった80余名の市民によって誕生した市民組織



いわき市で開催された「2019 夏 ほよ〜ん相談会」の様子（6月7日 いわき市生涯学習プラザ）

で、私もその集まりの一人だった。「阪神の震災の時にこんなことができたから」とかあるいは「阪神の震災の時にはできなかったことを」など、遠くなりかけていた過去の災害時の経験をノウハウに変えて身につけている人たちが多かったことを強く覚えている。連日、政府は放射能による被害を「直ちに影響が出るものではない」と繰り返していたが、しかしその場で政府の批判をする発言は封じられ、ただただ「自分たちでやらねばどうにもならないのだ」という決意を持った集まりだったと思う。

気功愛好家たちは避難所の人たちの身体のケアに、大工さんのグループは建物の修繕に、炊き出しに出かける人にはみんながカンパを渡し

た。北海道へ避難して来る人たちを支援する窓口が運営され、市民から提供された家具調度品の管理や配送をするうけいれ隊も組織された。ミサंगाやキルトを作り心に届くアピールで資金調達を始めたグループもあった。自発的な市民力によって急性期の活動が次々に実現されていった。

その後、被災地支援と避難者の受け入れ支援を軸に活動した「むすびば」は2014年3月に発展的に解散し、各々の得意技を進める幾つかの別団体となった。その一つが「みみすま」である。「みみすま」の代表理事は、「むすびば」の受付カウンターで北海道へ避難してくる人たちを真っ先に迎え入れサポートしてきたグループの中心的メンバーであるみかみめぐるさんで、「みみすま」の活動は彼女が築いてきたネットワークと強い信頼関係を地盤に続けられてきた。

「みみすま」の活動の中でも最も特徴的なものは、福島県川俣町（一昨年まで町の一部は計画的避難区域であった）の教育委員会との連携による保養を前提とした公立小学校の移動教室の実施である。2015年からの5カ年計画で、町内の全6校の小学校の5年生（または6年生）を順に初夏の北海道に招き自然体験学習をメインとした3泊4日を過ごしてもらおうこの計画は、つい先日その5年目を無事に完了した。「保養の機会はずべての子どもたちに平等であるように」純粋で根本的なこの思いを実現するためには、長年にわたる地道で丁寧なやり取りの積み重ねを要し、理解し賛同して下さる方々からの寄付や助成を必要とした。

みかみさんは「うけいれ全国」の共同代表も兼任するため、私たち「みみすま」メンバーは、全国各地の保養支援の活動と実情を知ることができている。「うけいれ全国」に加入している団体は、被災地から近い地域では「毎週末」、遠隔地では「長期」など地の利を生かした保養メニューを計画し、放射能からの避難を語りにくい状況下、「美術鑑賞やスケッチ旅行」「スポーツ合宿」のような冠をつけたプランも

あった。そもそも相談会の名称「ほよ～ん」は、「保養」を軽く表すための言葉の工夫から生まれたものである。また、福島県以外の高線量地域はさらに保養を訴えることが憚^{はばか}られ、公的サポートも圧倒的に少ない。

事故直後に被災地を脱することができた人がいる一方、被災地に留まった多くの人は除染を必要とする前代未聞の暮らしと向き合うこととなった。震災時に10代だった青年たちが子どもを持つことに不安を感じ始めるほどに時は進み、新しい局面が生まれている。だからこそ「ほよ～ん相談会」は、日々の暮らしでの不安や悩みを心置きなく口にできる貴重な場であり続けているのだ。「うけいれ全国」の相談会事務局の采配は素晴らしく、各参加団体をサポートしながら課題を共有してネットワーク作りを進め、また、政治的な色が付かないようにするなどの細心の注意を払いながら運営し、かけがえのない「場」を守っている。

「最低でも半月離れなければデトックスの効果はないから、ほんの数日の保養に意味はない」と主張する専門医がいる。けれども「ほんの数日でも不安を抱えた日常から離れることで心を癒してもらいたい」と保養を実施する人たちがいる。どんどん苦しくなる資金調達には賛同者が力を添える。この8年余のこうした全国的な保養活動の実績は、誰も経験したことのない放射能被害に対して一人一人の生活の現実に足を据え真正面から取り組んだ私たち市民の確かな経験値そのものであると思う。経験には、身体も心も思いもお金も全てが含まれる。いったいぜんたい何が真実であるのか確かめにくく混沌としながらも一見平静に見える社会（実際の2分の1の数値を示していると疑われる福島県内のモニタリングポストはまるでその象徴のように見える）の中で、これからも続く放射能被害と向き合う生活のためには、まだまだ市民の経験値を増やさなければならないのだと思っている。そして、そのためにも、届きづらくなっている小さな声に、もっともっと耳をすませていられる社会でなければと願う。

「ほよ～ん相談会」に参加して

原 慶子（カトリック大阪大司教区社会活動センターシナピス事務局）

2011年、当時シナピスセンター長だった神林宏和神父は、事務局会議の席で「3.11の地震・津波による被害は、時間はかかっても阪神淡路のように復旧、復興していくが、原発事故による復興の道のりは険しく長い。今は多くの人が被災地のために全力を注ぐだろうが、そのうちそれも薄れていく。私たちは、そうなったときにこそ忘れてはならない。この問題を直視して取り組まなければならない」と語っておられました。3月15日に起きた原発事故直後のことです。その後、教区では自発的に「保養」の受け入れをはじめた地区がでてきました。2012年教区社会活動委員会総会では、信徒が「さよなら原発の会」を結成し、「保養キャンプ」の取り組みを始めました。

そんな中、今年2月の正義と平和全国会議で、札幌教区の信徒であり、「NPO法人みみをすますプロジェクト」の事務局としても活躍されている佐藤裕子さんのお話を聞き、後日、「ほよ～ん相談会」のお誘いを受けて、見学させていただくことにしました。相談会の趣旨などについては佐藤さんが説明されているので、会の様子、印象に残った言葉を紹介します。

この相談会のチラシは今回はじめて福島県の郡山市、いわき市の教育機関を通し、子どもたちの手元に確実に届けられるように配布されました。参加された方の中には、「チラシを受け取って初めて、こういう取り組みがあるのだと知り、来ました」という家族もおられました。2日間で約50件の保養受け入れ団体が全国から集まり、参加した親子たちは自分たちのニーズに合った受け入れ先を積極的に探し、申し込みをされていました。ブースには医療相談室も設けられ、広島・長崎の原爆で被ばくされ移り住んだ方々の健康診断や、チェルノブイリの原発事故後、ベラルーシと交流し、夏休みに保養を続けている医師が相談にあたっておられました。

「ベラルーシでは年1回保養の権利がありますが、日本にはありません。国として制度化しなければならないことですが資金も出さない、保養も認めようとしないのは、放射能は危険だと認めたくないからでしょう」とおっしゃいました。また、2日目には、あるブースでお話を伺いました。「わたしは東京から移住してきました。事故後、東京でもホットスポットがある事がわかり、他人ごとでいた自分が当事者になりました。そこではじめて放射能を認識しました。最初は、数日でも離れて過ごす道を選びましたが、子どものことを考えると不安で移住を決断、夫を残して今は子どもとこちらに来て、受け入れのお手伝いをしています。移住するにあたっては心ない非難、中傷を浴びたこともありましたが、でも私は、子どもを守る、その一心で自分に言い聞かせながら過ごしています」。こんな切実な思いを私に語ってくださったお母さんの気持ちは計り知れず、胸を搔きむしられるような思いで帰ってきました。

この相談会に参加して「保養」の必要性を更に強く感じました。放射能は見えない、感じない。それが無いより怖いことです。低線量被ばくの問題はとて深刻です。未来ある子どもたちのいのちに対して、私たち大人は責任があります。「これからも支援の手を止めてはならない。宗教者はいのちを守るための活動をさらに広げていく使命がある」との声も聞きました。私たち教会に求められているものは大きいと感じています。命が脅かされていることに対して無責任であることは許されません。冒頭、神林神父がわたしたちに語ったことばの通り、放射能に向き合うということはそういうことです。

まずは、この取り組みを具体的に形にして、大きなうねりをおこせるように力を注ぎたいと思います。

沖縄「慰霊の日」第33回 カトリック那覇教区平和巡礼に参加して

■ 渡辺多嘉子（東京教区麹町教会信徒）

急に体調を崩した方の代わりにとのお誘いに乗り、すべてが我らの優秀なツアコンSさんのお膳立てによる沖縄行きでした。

対馬丸記念館

6月22日午後着で飛行場から、夕食までの時間をと直行した「対馬丸記念館」。日常を引きずりボォーとしていた頭と気持ちにいきなり飛び込んできた児童の遺影の数々…聞き知ってはいたはずだけど…沖縄戦を目前にして食糧確保のための本州への集団疎開児童らを乗せた貨物船は初めから敵のレーダー探知下にあった。魚雷により撃沈され乗船者1788名の約8割がなくなったという。ヤマトで雪が見られると無邪気に語っていた子どもたちの顔、顔、顔。貧しい中にも楽しかった学校生活の遺品。やっと捕まった筏から妹が波にのまれた兄の証言。何日も波に漂い、生き残った者たちのその後の苦しみ…

魂魄の塔への平和巡礼

23日は沖縄の平均的梅雨明け日とのことだが、今年はその心配もなく、時折強い雨風に遭う巡礼となった。6時から小祿教会での主日ミサ、教会員の方々手作りのおにぎりをほおぼり、7時に出発、魂魄の塔までの16キロを歩く。途中3か所で祈り、証言を聴き、水とキャンディーをいただく。救護班や何台もの車が伴走して、声をかけてくれる。東京で、「日影がないから全部歩こうと思わないほうがいいわよ」との忠告を受けてきた私だが、雨と適度な気温に助けられ歩き通すことができた。初参加と伺う鹿児島の中野裕明司教もずぶ濡れになって歩かれた。途中、京都や大阪から参加の方々とおしゃべり、後から追いつき追い越す若者たちの背中を見ながら歩く。退職して初めて歩くというウチナンチュの孝子さんは、観光タクシーの運転手をして女手ひとつで3人の子どもを育てたという。感心して聴き、こちらのこともほちほち語るうちに彼女は「なんくるないさ～」と言う。何もしあげられないけど、聞いて共感したときに



かける言葉とか。沖縄の懐につつまれた。

魂魄の塔はいたるところにあった遺骨を集めた最も古い塔。巡礼に参加できなかった方たちに託され、めいめい首にかけて歩いた千羽鶴とお花を供えて祈る。那覇教区のウェイン・バーント司教、中野裕明司教、谷大二司教、高見三明大司教らも並ぶ。午後は国際反戦集会に参加。歌や踊り、辺野古・高江からの報告、日本軍「慰安婦」を演じる、きむきがんさんの一人芝居が重かった（写真）。1995年、初めて沖縄を訪れた時にもこの場にいた。その時は大勢の人の向こうに平良 修牧師の声を聞いた。この日もつれあいの悦美さんと一緒に参加されていた。あの時「小さな島の大きな問い」を歌っていた「波平〜ズ」の高校生たちはどうしているかしらん…

翌朝は豪雨の中、Sさんは果敢に車を飛ばし、辺野古、高江へ。工事は休みで覚悟の座り込みは叶わず。4月に米軍＝沖縄防衛局？に撤去され、カンパにより建て直された高江のテントにはこの日、伊佐育子さんが静かに座る。雨の合間に背の紅い小鳥がテントを覗く。

夕方の普天間ゲート前ゴスペルに参加できたのはSさんの見事な運転に依る。この日は官邸前ゴスペルで一緒にいるバプテスト連盟女性会の方々も訪れ、神谷武宏牧師の司会で70数名の歌声が響いた。このほかにも書ききれない数々の出会いがあり、この場に導かれ、ひととき置かれたことへの感謝は計り知れない。

ザベリオ470年 ～歌集『ザベリオ』を上梓して～

■ 大口玲子 (大分教区信徒 歌人)

5月に歌集『ザベリオ』を上梓しました。私の六番目の歌集です。なぜ「JP通信」に短歌の話題が?と思われる読者もいらっしゃるかもしれません。

短歌は何となく風雅な趣味と思われることも多いのですが、私が短歌を始めたきっかけは新聞の短歌欄です。全国各地からの投稿歌を毎週読んでみると、田植えや収穫の短歌が並ぶ季節があり、社会的な事件や大きな災害への反応がリアルタイムで寄せられ、毎年8月には戦争の記憶に触れる作品が目につきました。世代も住む場所も職業も異なるさまざまな人の暮らしや人生が、その人自身の言葉でぎゅっと凝縮されており、海外在住者の歌や、獄中からの投稿もありました。インターネットもなかった時代、高校生だった私が現代社会の多様性をリアルに実感できる場が、新聞歌壇だったのです。

一方で短歌は、1300年以上の歴史を背負った伝統的な詩形です。そのうち『古今和歌集』の成立した905年に始まる短歌史の534年間は、天皇や上皇の命により21の勅撰和歌集が編纂された時代でした(この534年間は、日本におけるキリスト教の歴史よりも長いのです)。太平洋戦争中は「短歌を以て国家総力戦の一翼たらんことを期す」という宣誓が日本文学報国会短歌部門でなされ、多くの歌人が戦意高揚に協力しました。唐木順三は『自殺について』(1950)の中で、『きけわだつみのこえ』の学徒兵もA級戦犯も同じように辞世の短歌を残し、その表現には類似性さえあることを指摘しています。

五七五七七という定型だけをきまりとして、短歌は誰もが自由に自分の思いを込めることができる詩形です。しかしこの長生きでしたたかな詩形は、時に多様性や個性をやすやすと呑み込んでしまう側面があることを、中学生や高校生に短歌を教える機会を得るようになってからは、特に心に留めるようになりました。

短歌に横軸(多様性)と縦軸(歴史)があるとして、今回の歌集『ザベリオ』で私が意識

したのは後者です。大きな歴史としては、「令和元年」に沸き返る今の日本で、「フランシスコ・ザビエル来日から470年」をカトリック信者として日々どのように生きるのか。自分史としては、母として小学生の息子にどのように戦争を教え得るのか。この二つの視点から歌集をまとめつつ、思い出した文章があります。

なぜ、日本の詩人は死刑にならずにすんでいるのか。言論の自由が守られているおかげか。そうではない。死刑にする必要がないからである。(佐佐木幸綱「詩人の死刑」『萬葉へ』1975)

これは、韓国の詩人である金芝河の死刑判決をきっかけとして、「柿本人麻呂は刑死した」という仮説に触れつつ書かれた評論の一節です。学生時代に読んで衝撃を受けたこの評論は今から40年以上前に書かれたものですが、今もなお、というより今の時代にはますます重たい問いかけとして響きます。さらには、「フランシスコ・ザビエル来日から470年」という視点から日本の殉教者たちを思う時、権力者が彼らを「死刑にする必要があった」その生き方と信仰の在り様はどのようなものであったか、他人事ではない自分の問題として切実に考えさせられます。

歌集中には、沖縄の基地や戦跡を訪ねたり、安保法制違憲訴訟の原告として法廷に立ったりする場面もあり、そのような歌が注目されることも多いのですが、ほとんどは、息子と過ごす日々の暮らしの中で生まれた作品です。あるいは、米軍基地も憲法の問題も、日々の暮らしの地続きにあるものとして短歌に詠んでいると言った方がよいのかもしれません。

宮崎でもつとも広き法廷に空席ぼつり
イエスが座る 『ザベリオ』

小さな泉の弱さ豊かさ～どれだけ共にいられるか

■山秋 真（ノンフィクションライター）

「原発は新設しないと言いながら、なぜ、上関原発は、重要電源開発地点の指定を解除されず、国の交付金が毎年、上関町へ落ちるのか？」

今年6月19日の衆議院経済産業委員会で、立憲民主党の宮川伸議員（千葉13区）が世耕弘成経産大臣を問いつめた。

日本の国会が茶番劇と化して久しい。閣僚たちは説明責任を果たさず、辻褄のあわない答弁を繰り返す。逃げ切ることが大事なようだ。逃げ切られる側に対して、もどかしさも否めない。だが、野党議員が鋭い質問を重ねて問題点を炙り出すときもある。この日も然り。

宮川議員はまず、政府が現時点で原発の新增設とリプレースを想定していないこと、上関原発は新設にあたることを確認。中国電力が6月10日、上関原発の建設のための海の埋立免許の期間延長を山口県に申請したこと、県は許可するだろうと言われていることを述べると、このような事態が「あっていいのか」と問うた。

「埋め立て工事の許可は自分の権限でない」。

そう応じた世耕大臣に、議員はさらに問う。

宮川：国が重要電源開発地点として上関原発を指定していることを理由に、県は免許の期間延長を許可しようとしている。だがその指定は、経産大臣の権限で解除できる（重要電源開発地点の指定に関する規程第7条）。例えば「計画の具体化が確実」でなければ、大臣は指定を解除できるのだ。原発を新設しないと言いながら、なぜ「計画の具体化が確実」なのか。

世耕：上関原発は、事業者が計画を遂行する意向で、法令上の手続きや一定の地元理解が進んでいるから、「計画の具体化が確実」と考える。

ただ、その原発を、新設を認めるかどうかは規制委員会が判断すること。政府としては現時点で原発の新增設は想定していない。

宮川：原発がとまった2011年から、上関町に電

源立地交付金は毎年いくら出ているか？

資源エネルギー庁担当者：11年度以降、毎年度約8千万円の電源立地地域対策交付金が、11～12年度は総額約22億円の原子力発電施設等立地地域特別交付金が交付された。

「新設するという密約があるのか。あるいは、安倍総理の山口県だからお金が落ちるようになってきているのか？」

冒頭の問いの際、宮川議員がそう疑念を示したのも当然だ。この期に及んで原発計画はなくなり、地元の暮らしはたびたび混乱する。例えば漁業補償金や埋立免許をめぐる、あるいは選挙のたびに。

上関原発の計画が浮上した37年前に女性がはじめた祝島の「原発反対」デモ。世代交代しつつ続き、いまでは1300回を超えた。この間、高齢化と人口減が進み、当初は1300人以上だった島民は現在約350人。

一方で、UターンIターンJターンする人もいる。島内で飲食店が復活し、「若手」と呼ばれる層は50歳代から20～30歳代に若返った。今や乳幼児の声も響く。やはり祝島は、小さいけれど枯れない不思議な泉だ。何を学べるか、どれだけ共にいられるか。本連載の最終回にあたり、そんなことを思っていたら、海へ注ぐ小川があった。その水は宇宙の仕組みのなかで循環し、地球に降り大地に浸透。脆く弱い部分から湧き出でて、いのちを育み生かす。祝島の弱さ豊かさの不思議は、それに近い気がする。



目次

- 特集 いまこそ、いのちと暮らしと子どもたちのために!
- 2 「自分たちの置かれた場で平和を実現する」
～イージス・アショア配備反対 …………… 中井 淳
 - 3 エクアドルから萩へ、そして未来へ… …………… 浅井朗太
 - 6 原発事故から8年目。足元から考える支援活動
…………… 佐藤裕子/原 慶子
 - 9 沖縄「慰霊の日」第33回 カトリック那覇教区平和巡礼に参加して
…………… 渡辺多嘉子
 - 10 ザベリオ470年 ～歌集「ザベリオ」を上梓して～ …………… 大口玲子
 - 11 連載(最終回) 小さな泉が川となる …………… 山秋 真
 - 12 まんが「修練者の石橋さん」
etc 事務局

表紙写真 イージス・アショア配備予定の陸上自衛隊むつみ演習場(萩市)を望遠して
左から、光延一郎神父(日本カトリック正義と平和協議会)、前田哲男さん、浅井朗太さん(「イージス・アショア」の配備計画の撤回を求める住民の会)、中井 淳神父。2019年6月15日撮影。本号p.1~p.5記事参照



各地からの報告

正義と平和 えとせとら…

事務局より



2019年3月2日、正義と平和協議全国会議にて

日本カトリック正義と平和協議会に、15年間、委員、専門委員として関わってくださった、マイケル・シーゲル神父(神言修道会、名古屋教区)が、2019年7月4日午前3時1分、愛知県がんセンターにてご帰天されました。享年72歳。2016年3月、ドイツでの国際会議から帰国後、ガンが発見され、一度は克服したものの、今年正月、再発が見つかりました。1995年から2003年まで、ローマの神言会総本部で、正義と平和コーディネータを勤められた後、日本に戻られ、憲法、安全保障、環境問題、原発問題など多岐にわたるテーマで、各地での講演や執筆活動に力を注ぎ、生涯、正義と平和の実現のために尽くされました。息を引き取られる直前、ごく親しい方に出されたメールに、「自分の人生がとても幸せなものだと思う」と書き残されました。シーゲル神父様の、神様のもとでの永遠の安息のために、お祈りください。

編集後記

2016年10月、JP通信200号発行を記念して3年間の予定で開始したリレー連載「小さな泉が川となる」が今月号をもって、終了しました。執筆を引き受けてくださった、浜 矩子さん、バク・ユミさん、山秋 真さんには、心より感謝いたします。毎回、執筆者それぞれの個性のちがいが楽しい、原稿の待ち遠しい仕事となりました。連載名は、カトリックの女性3人というコンセプトで、エステル記(ギリシャ語)「モルデカイの夢」から、選びました。次号からの新連載もリレー形式で、今月号でも執筆してくださった、歌人の大口玲子さん、宇井彩野さん(フリーライター)、えなこ さいちさん(福祉職員)にお願いすることが決まっています。



発行日 2019年8月1日(隔月発行)
編集発行 日本カトリック正義と平和協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,500円(送料共)
郵便振替 00190-8-100347
加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>